大空に翔ける

令和2年度 日之影中学校だより

3月号

日之影中HP

校長 伊東泰彦

河野知事が来校！立志式で生徒と対談！

2月10日に開催した日之影中の立志式に、宮崎県知事の河野俊嗣様が来てくださいました。毎年一回、県内の小中高いずれか一校で行う「知事の白熱教室」の実施校として本校が選ばれたからです。

立志式は3部構成。第一部では生徒たちが職場学習先で発見・体感した「日之影町内で暮らし働くことの魅力」を自作動画で発表。それを受け、第二部では「新しいゆたかさへの挑戦～中山間地の魅力を再認識する～」とのテーマで、本校の二年生と知事が対談しました。日之影のもつ「ゆたかさ」について様々な角度から意見を交換する生徒と知事の対話が見事でした。

そして第三部で、立志の誓いや将来展望などについて生徒が意思表明をしました。コロナ禍の中、とても貴重な経験と学びが得られました。

生徒たちに語りかける河野知事

生徒のみなさんには、

変化に立ち向かっていける人
故郷に誇りを持ってそれを語れる人

になって欲しいと願います！

生徒）難しい局面をどうやって乗り越える？
知事）自分一人でやるのでなく、多くの方の意見に耳を傾け、力を合わせることが大切！

生徒）なぜ出身地でない宮崎の知事になったのか？
知事）使命感である。「鬼滅の刃」で言えば禰豆子を守る覚悟を決めた炭治郎の思いと同じ。

生徒）もし中学生に戻れたら何をやりたい？
知事）①自分の中学になかったサッカー部へ入部
②受験のためにあまりできなかった読書
③祖父母ともっと話しておきたかった

対談後に知事と記念撮影

特集番組がネットで視聴できます！

【のびよ！みやざきっ子】令和3年2月27日放送「障がいのある人の生涯学習の充実を考える」ほか

①「宮崎県：4ch 教育庁チャンネル」で検索。
②UMK【のびよみやざきっ子】の2月27日放送をクリック
③30分の番組中の17分～23分あたりで6分程度、本校の立志式が特集されてます。

史上初！修学旅行を町内で行います！

コロナ禍により、本年度の修学旅行はどの学校でも大きな制約を受けました。秋口に県内で実施できた学校を除き、多くの学校が中止を余儀なくされました。

本校においても、当初の「6月下旬の関西方面」を、いったん「11月下旬」へと実施時期を変更。しかし第二波の影響を見て「3月に県内で実施」へと再修正、さらに第三波の影響を考慮し、最終的には「町内（一部郡内）」での実施へと苦渋の決断を致しました。いわば「スーパーマイクロツーリズム（超近場旅行）」の発想です。

本来、修学旅行は「日常の生活や学校教育では学べないことを体験的に学ぶ」ため、地元とは異質の場所へ旅行して知見を広げるのが通例でしたが、コロナ禍ではこうした「常識」からの転換が求められます。生徒の実行委員会を立ち上げ、職員と生徒が協力しながら知恵を絞り、**「見落としていたものを見つけに行こう！」**というコンセプトで修学旅行の内容を企画。左のようなポスターも制作しました。竹細工やわら細工の体験、渓流釣りやクライミング、ラフティングやパワースポット巡り、地元のいちごやジビエ、川魚や高千穂牛などの食材を堪能する内容が計画できました。日之影町観光協会をはじめ、町教委や日之影町内の皆様方、高千穂観光協会などに絶大なご協力を頂いております。深く感謝申し上げます。

いちご狩り体験（２月）

スキーコース（２月）

【実行委員長あいさつ（要約）】　二年　後藤　美夢

私たち2年生は、新型コロナウイルスの影響で度重なる修学旅行の延期やコース変更があり、だんだん気持ちが下がっていきました。最終的に「町内（一部郡内）」になったとの結果を聞いた時は、正直なところあまりうれしくはありませんでした。（中略）

しかし、いつまでもこうした気持ちでは、せっかくの修学旅行が「楽しくない思い出」になってしまいます。そうしてはいけないという意志のもと、私たち実行委員と校長先生と先生方で、どうすれば町内でも「楽しかった。日之影の魅力を分かってよかった」とみんなが思えるか話し合いを重ねました。

話し合いの結果、修学旅行を2回にわけ1回目を2月に、2回目を3月に一泊二日で計画しました。2月に行った修学旅行は私的には成功だったと思っています。2コースに分かれ【内側からの日之影】【外側からの日之影】を感じたのではないでしょうか。3月の修学旅行では「見落としていたものを見つけられる」よう、【内側から見た日之影町の魅力】【外側から見た日之影町の魅力】を意識して取り組んでくれると嬉しいです。何よりも、人生に1回しかない中学校の修学旅行を精いっぱい楽しんでください。

いよいよ卒業！ありがとう３年生！

光陰矢の如しと言いますが、あっという間に3月となり、令和２年度の本校を牽引してくれた3年生がもうすぐ卒業となります。今年の３年生は、「底抜けに明るくて盛り上がりがあり、各種イベントに協働で取り組むチームワークの良さ」が特長の素晴らしい学年でした。まさに学級目標の「ＯＮＥ ＴＥＡＭ」が体現され、後輩たちへすばらしい伝統を残してくれたと感謝しています。高校に行っても変わらず活躍してください。卒業生の皆さんが「大空に翔ける」姿を楽しみにしています。

入試を終えた３年の代表生徒が、１年生や２年生と対話し、中学生活の充実や進路実現へのコツを語ってくれました。とても貴重なキャリア教育の時間となりました。

対話の様子

甲斐真心さん

私は１・２年の復習が大切だと話しました。例えば得意科目と苦手科目の差を大きくしないことや、分からない問題をそのままにしないことなどです。２年生の中にはまだ悩んでいる人もたくさんいました。卒業まで、自分が伝えられることは伝えていきたいです。

甲斐唯菜さん

私が伝えたことは「積極性を今のうちから身に付けておいて方がいい」ということ。面接で挙手して発言したり自分をアピールしたりできるし、社会に出てからも役立つと思います。私自身も高校で様々なことに積極的になりたいです。

坂本佑月くん

僕が１・２年生に伝えたことは、「人の前でしっかりと自分の意見を言えるようになって欲しい」ということです。僕自身は、総合での発表や体育大会で自分の意見をきちんと表明していたことが入試の面接でも役だったと思ったからです。

ICT活用、上野中とオンライン交流実施！

国のＧＩＧＡスクール構想の前倒しとして、本町がいち早くタブレット端末を生徒に配布していただいてから2か月が経ちました。この間、調べ学習やネット検索など「①学びのインプット場面」や、プレゼンテーションやレポート作成など「②学びのアウトプット場面」での活用が進んで生徒のスキルも向上し、①②では一定の成果が実感できた。次は「③各々の学びを**いかにつなぐか**」の研究が必要なフェーズに入ってきたと考えている。そのような中、一年生が上野中一年生とのオンライン交流授業にチャレンジし、九州大学やＧＩＡＨＳ事務局の協力も得ながら2月26日にトライアル授業を行った。西臼杵の小規模校は各学年一クラスしかないので、常に同じ集団で学習することになり、ともすれば視野や価値観の拡大が難しかったり他者へのプレゼンスキルが停滞しかねない。そのような中、オンライン交流は移動することなく教室と教室をつなげるので、「移動時間や経費の無駄を省く」と言う点で圧倒的な強みを発揮でき、他にも「言葉の使い方やプレゼンスキルなど表現力の向上」「意見交流による学びの広がり」などの点で大きな可能性が見えてきた。今後に期待したい。

画面の向こうに上野中

ﾉｰﾄﾙﾀﾞﾑ大学の先生が飛び入り講話

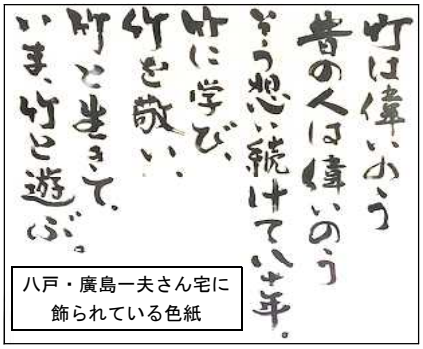
カメラとマイクに向かって話します

ひのかげの郷

『伝統とは、■の維持であり、●への崇拝ではない』「わら細工たくぼ」の甲斐陽一郎代表が、本校生徒への講話の中で最後に語った言葉である。「■と●に入る言葉は何と思うか」という投げかけは、日之影のすべての伝統工芸や文化に関わる本質的問いであり、全員の思考が活性化した▼修学旅行を町内で行うに際し「竹細工とわら細工体験だけは是非行わせたい」と生徒の実行委員にたのんだ。世界に誇る匠の技であり、後継者も希少な日之影の宝を、次代の日之影を担う本校の生徒たちにも深く理解しておいて欲しい(自分自身も少しでも理解したい)と願ったからである▼竹取物語では冒頭の「いまはむかし竹取の翁といふものありけり」に続き「野山にまじりて竹をとりつつ**よろづのことに使いけり**…」とある。これは竹を素材とする道具・竹細工がいかに我が国の生活用品の主役を担っていたかを物語っている。高度成長期に入って、プラスチックやビニール製品が主流になると一気に竹細工は衰退したようであるが、むしろその芸術文化的稀少価値をスミソニアン博物館(ルイーズ・コート氏)は評価したのかもしれない▼現代では、竹細工・わら細工とも、生活文化というよりも芸術文化に近い存在なのかもしれないが、いずれにせよその高度な匠の技は発展的に継承されて欲しいし、日之影の子ども達にもその価値を語って欲しいと願う。冒頭の問いに対し、私自身は「■＝魂、●＝技」と想像し、生徒の一人は「■＝今、●＝昔」と発表した。正解は『**伝統とは、炎の維持であり、灰への崇拝ではない**』であり、甲斐さんは、「炎＝その時代を生きる人の情熱」であり、「灰＝古いもの」と解釈して下さった。作曲家グスタフ・マーラーの言と知って驚いた。奇しくも赴任したばかりの頃に書いた5月号で「日之影の風景と吹奏楽部に、マーラーの第五番アダージェットを想起する」と書いたことを思い出した。今回の修学旅行体験で日之影に継承されてきた「炎」を少しでも感じることができれば…と願っております。

（校長・伊東泰彦）

修学旅行の事前学習講話をして下さった甲斐陽一郎さん（左）と小川鉄平さん（右）



八戸・廣島一夫さん宅に飾られている色紙

English Letter by Naomi Teacher

Graduation Around the World

Graduation is important to a student and often involves a ceremony. All countries have their way of celebrating a student's achievement.

In Argentina, after the ceremony is over, students have food such as sticky things like ketchup and syrup, thrown at them. Italian graduates also have food being thrown at them by friends and family, and they often wear costumes. Students in Germany usually don't have any ceremonies when they graduate and are more focused on taking the final exam. Female Chinese graduates have started a new trend of renting wedding gowns to wear to graduation. In Thailand, diplomas are given out to students by members of the Royal family. No one is allowed in the hall except the graduates. In Finland, PhD graduates are given a traditional sword and top hat during a ceremony. The sword and hat symbolize the freedom of research and the fight for what is good, right and true.

Military schools such as the US Air Force Academy in Colorado hold their ceremonies in football stadiums. They started the tradition of graduates throwing their hats into the air as the ceremony concludes with a jet flyby.

世界中の「卒業」

卒業は学生にとって重要であり式典を伴います。国によって、生徒の成績を祝う方法がそれぞれあります。

アルゼンチンでは、式典後、生徒たちはケチャップやシロップなどの粘着性のあるものを投げつけられます。イタリアの卒業生も衣装着ながら友人や家族から食べ物を投げられます。ドイツの学生は通常、卒業時に式典を行わず、最終試験を受けることに集中しています。最近中国の女性卒業生は、卒業式に着るウェディングドレスを借りるという新しいトレンドを始めました。タイでは、王室のメンバーによって卒業証書が学生に配られます。卒業生以外は誰もホールに立ち入ることはできません。フィンランドでは、博士号を取得した卒業生には、授与式で伝統的な剣とシルクハットが贈られます。

剣と帽子は、研究の自由と、善、正、真実のための戦いを象徴しています。フィンランドでは、博士号を取得した卒業生には、授与式で伝統的な剣とシルクハットが贈られます。剣と帽子は、研究の自由と善・真実のための戦いを象徴しています。

アメリカ合衆国コロラド州の米空軍士官学校などの軍学校は、スポーツスタジアムで式典を開催しています。セレモニーがジェットフライバイで終わると、彼らは卒業生が帽子を空中に投げるという伝統を始めました。